「良書ご案内」

書籍名	生物はなぜ死ぬのか	著者名	小林　武彦
出版社名	講談社現代新書	発行年月	2021年 4月

こんなに難い本が読まれている。 NHKでも紹介され着実に売り上げを伸ばしている。
書籍の帯には「現代人を救う新しい人生観」「これまでの死生観を変える1冊」とある。
小林は哲学者でも、宗教人でもなく生物学者だ。 生物学者の説く死生観を紹介する。

1. 進化が生物をつくった

今から50億年前に太陽が生まれ、46億年前に地球を含む太陽系ができた。 10億年前には多細胞生物が誕生する。 最初はたった1つの細胞で、偶然に地球に誕生したと思われる。
その中で効率よく増えるものが「選択」的に生き残り、「変化と選択」が繰り返された。
人は20万年ほど前にアフリカで誕生した。いま地球に存在する生き物、もちろん私たちも進化の結果できたものだ。 私たちは進化の最前線をいま生きている。

2. 「死に方」は生きるために進化していく過程で「選択された」ものである。

ヒト以外の霊長類の基本の死に方は、生殖を終えると、ピンピンコロリと死ぬことがほとんど、プログラム化された積極的な死に方にみえる。 生物が生まれてくる最大の目的は子孫を残すこと。 どのような生物でも本能的にそのことを知っているようだ。 本書ではカゲロウの事例を紹介している。 カゲロウの成虫の寿命はわずか24時間足らず、脱皮して、交尾、産卵のあとは急速に老化し死んでいく。 彼らには口がなく、ほんのわずかしか生きないので、ものを食べる必要がないためだ。 究極にプログラム化された死と言える。人間のような子育てが終わった後の長い老後はない。 つまり老後の心配は無用だ。

3. すべての生き物は死ぬために生まれてきた

生物は奇跡が重なってこの地球に誕生し、生き残るために多様化し、絶滅を繰り返して選択され、進化を遂げてきた。 とんでもなく奇跡的に生まれてきた私たちは、その奇跡的な命を次の世代へ繋ぐために死ぬ。
「命のタスキ」を次に委ねて「利他的に死ぬ」のだ。 生まれてきた以上、私たちは次の世代のために死ななければならない。 小林は生物学的な知見により「死」を肯定的にとらえている。
人間、生き物は生まれるのは偶然だが、死ぬのは必然といえる。 私たちが「生きている意味」が見えてきた。

人を含む大多数の生き物はあらかじめ「死ぬようにプログラム」されている。 「プログラム」は極めて自然で必然的なものとして設計されている。
人は死に対する恐れが非常に強く、それはヒト固有のものだ。 喜び、悲しみ、怒りなどの強い感情もヒト固有のものだ。 本書による死に対する生物学的なアプローチが皆様の恐れを少しでも和らげることを願っている。

岩城

編集後記

この時期、桜を仰ぎ見ることが多く、思わず桜にちなんだ歌を口ずさむことも多い。しかし、さくらはひらひらと、あるいは風に散り舞うことが「死」をｲﾒｰｼﾞさせるとも言われる。また坂口安吾氏の「桜の森の満開の下」のようにさくらの妖艶さとまだ寒々しさが残る空気感なども想起させる。さて、皆様はさくらに対してどのような思い出が？

今月から診療報酬改定が施行され、介護保険事業計画8期は2年目です。2024年は医療・介護同時改定。医療機関も介護事業者も、地域資源を有効活用し、今まで以上に地域における役割分担が求められます。

発行所：株式会社ライフデザイン研究所　所在地：〒541-0048 大阪市中央区瓦町3-4-8ｱｻﾋﾋﾞﾙ2F
Tel 06-4708-6844 Fax 06-4708-7067　編集人 伊藤